# モブ厳な恋愛ゲームの世界らしい

飯食ってソシャゲして寝る人

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

恋愛ゲームの世界に迷い込んでしまった主人公くんは、好感度がＭＡＸに近いヒロインたちと平和に過ごすことができるのか？　出来たらいいな。

# 目次


んなアホな ―― 1
プレゼントと三色団子と引き篭る奴 ―― 7
小悪魔セーターとは小悪魔なのである。 ―― 14
大体みんな生きてる幸せな世界 ―― 22
こうなる運命だったのだ ―― 28
クローゼットの隠し事 ―― 34
高く付くぞ、オレの愛は ―― 40

# んなアホな

恋愛ゲームとは……登場するキャラクターの好感度をあげ、最終的に恋人になるゲームだ。

ここにとあるソフトがあります。

『戦姫絶唱シンフォギアＶＬ』

そうです。シンフォギアの恋愛ゲームです。１期から５期までのキャラクター（一部を除く）を攻略する事ができるゲームで、ＶＲにも対応しており発売された時は並ばなきゃ買えませんでした。

このゲームが発売されてからはや２年。

このゲームがまぁまぁのゲームだったな、と評価される理由の一つにキャラクター一人一人の攻略難易度が高く、日常生活の中で敵に襲われゲームオーバーになることもあるし、二股しようものなら風鳴弦十郎さんからキツイ正拳突きを戴くのだ。食らった人たちの感想は「痛みは無いけれど衝撃で目の前がグルングルン回り、猛烈に酔う。世界一怖いジェットコースターに安全バーなしで座らされた気分」だそうです。ＶＲ持っていたら食らってみたかった、Ｍなんじゃなくてあくまで興味があるだけで。

それを聞いてワザとやられて動画をサイトにアップする人たちも多数いたが、やられた人も見た人も酔ってしまう悪魔のような動画が完成され、弦十郎の正拳突きがＳＮＳのトレンドに上がったくらいだ。

そんな話題性を含めた評価がまぁまぁなのだ。

ちなみに敵に対抗する手段なんてあるはずがないので、敵が出た時は大人しく死（ゲームオーバー）を受け入れましょうと攻略サイトには必ず書かれている。

「誰をはじめに攻略しようか……」

長ったらしい前置きはさて置き。今一番僕を悩ませているのは誰をはじめに攻略するか、だ。全員好感度は最大の一歩手前に留めてあり、プレゼントなりデートなりをすればＭＡＸになる。ここまでするのに大変だったなぁ。

全員分のエンディングを見ることは決めているのだが、適当に選んで攻略したくない。
やはり主人公である立花響か、それともその親友の小日向未来か、はたまた人気が高い雪音クリスか……
「えぇーい！　悩んでても仕方ない、とりあえず起動しよう！」
パッケージからソフトを取り出してゲーム機に挿入し、電源ボタンを押した。
「ん……？　なんだ？」
タイトル画面が映るはずなのに、ずっと白いまま固まってしまった。ゲーム機を見てもちゃんと電源ランプは付いているし、買って間もない機種だから故障なんてあり得ないはずだ。
「テレビの故障か……？」
ため息を吐きながらテレビに近づく。
その直後だ。テレビが一瞬だけ強い光を放ったのだ。
「うわ眩しっ!?」
幸いにも光はすぐ収まったが、今度は真っ暗な画面になってしまった。
「えー……マジで壊れた？」
今度はテレビの方が逝かれてしまったらしい。リモコンをポチポチ押してもうんともすんとも言わず、真っ黒な画面で自分の姿が写っているだけだ。
ピコン　ピコン　ピコン
メッセージアプリに次々とメッセージが届いた。
「こんな時に……また誰かがスタンプ連打してんのか？」
携帯を確認すると、そこには見覚えのない名前の人たちが表示されていた。
「ん？　誰だ、この人たち……」
ビッキー『今日予定空いてる？』
ズバババンさん『今日の予定なのだが……』
キネクリ先輩『今日なんだけどよ……』
ここまで読んで、ふと気づいた。今やろうとしていたゲームでこん

な名前の人たちが居たことを。
「あいつらがなりきって送ってたり？　でも、こんな事する意味ないしなぁ」
友人がキャラになりきってメッセージを送ってきていると初めに思い浮かんだが、友人の性格を考えるとそんな事をしないだろう。
次に考えられるとすれば、僕のＩＤが何処かに晒されて、ふざけた人たちが送ってきているか……。
考え始めるとだんだんと怖くなってしまい、既読も付けず携帯をしまった。
「もう寝よう……」
やりたかったゲームができなくなり、更にこの意味のわからないメッセージが来たりで精神的に疲れた僕はそのまま眠ることにした。

---

次の日

「滅茶苦茶溜まってるな……」
メッセージアプリの上に８０という数字が浮かんでおり恐らく彼女？らのメッセージなんだろう。ここまで来るとよくやっているものだと逆に感心する。
「あれ……？」
顔を洗い、テレビの様子を再び見ようとしてようやく気がついた。
「ソフトが無い」
テレビの前に置いてあったはずのパッケージが消えていたのだ。ゲームソフトを入れていた棚をいくら探しても、シンフォギアのパッ

ケージは見つからなかった。
「ゲーム機にも入ってない、うっそだろ？　昨日入れたまま寝たんだぞ!?」
　夜中にゲームのソフト一本を盗みにくる泥棒なんているはずも無いし、そもそも窓も玄関もキチンと鍵を閉めていた。だからこんな事はあり得ないはず……なんだが。
「ハハ……テレビも壊れ、ゲームソフトも消えたってか。どうなってんだよクソが」
　衣類が入ったタンスも食器棚も、探せる所は全て探したのだが、ソフトは見つからなかった。
　時間は現在１０時２０分。ソファにグッタリと座り込んでいたら、携帯電話に着信が入った。
『デス子』
「誰だこれ？　……もしもし？」
　登録しているという事は、少なくとも変な奴ではないだろう。そんな浅はかな考えの元通話ボタンを押す。
『あ、やっと出たデス！』
　聞こえてきたのは明るい少女の声だった。何処かで聞いたような、そんな気もする。でも、知り合いにこんな子は居なかったはずだ。
「えっと……デス子さん？」
『アタシはデス子じゃないデスッ！　もう、何度言えば分かるんデスか？』
「あー……うん、ごめん」
　なんだか知らないが謝ってしまった。
（僕の携帯に番号がなぜ入っているかはともかく、この子は僕の事を前から知っているような素振りだよな……もう少し、話してみてもいいかもしれない）
『んん、えっとデスね。今日電話したのは、予定が空いているか確認したかったんデス』
「予定？　何処か、出かけるつもりなの？」
『そうデス！　遊園地に行きたいデス！』

「遊園地って……あれ？」
　朝から掛かってくる電話、デス口調の女の子、そして遊園地……僕がゲームでやった内容とあまりにも似ていた。
『どうしたんデス？』
「えーっと……大変失礼ではございますが、貴女様のお名前をお伺いしたいんですが――」
　恐る恐る電話の向こう側にいる彼女に名前を聞いてみる。
『――アタシの名前は暁切歌デスよ？』
　あかつききりか、暁切歌……ハ、ハハ……いやぁアニメのキャラと同姓同名の人が現実にいたんだなぁ……
「つ、月読調ちゃんは元気？」
『元気デスよ？　なんだかさっきから様子がおかしいデスよ？』
「ハハ……疲れてるのかも……また後で電話するから、切ってもいいかな？」
『分かったデス！　待ってるデスよッ！』
「うん……ありがとう、それじゃあ……」
　デス子こと暁切歌ちゃんとの通話を終え、僕は膝から崩れ落ちた。
「どうなってるんだ、本当に！　ここはゲームの……アニメの世界だって言うのか？　いやいやあり得ないだろ、今時！　寝て起きたら違う世界にいるなんて！」
　頭がこんがらがりそうだ。髪をぐしゃぐしゃしながら僕は叫んだ。
「もしここがシンフォギアの世界なら、絶対死ぬ。何をしていても死ぬ」
　モブに厳しいアニメと言われるシンフォギアで何の力も無い一般人が生き残る術なんてあるのか？　司令に弟子入り？　ツテも無いし鍛えた所で一般人に毛が生えた程度にしかならなさそうだし、かと言って聖遺物なんて、探すのも無理だし適合するのも宝くじが当たるほうが現実的だし……！
　ゲームの世界では恋愛ゲームという事もあってかあまり過激な事は無かったが、ここがそうとは限らないし！
「詰んでる……終わってる……」

それに、彼女らが本物なら装者たちと知り合いの僕が敵サイドの面々に狙われる可能性だって捨てきれない。あぁ、テレビが生きていたら適当に情報が得られるのに……そうだ。今から全員着拒して部屋に閉じ籠るか？

「そうだ、そうしよう。ここが安全な世界だとわかるまで、着拒しよう」

そう思ってからは早かった。メッセージアプリを起動して彼女たちの連絡先を削除、電話も着拒した。家を知られていないなら、これで安全な筈だ。

本当なら今すぐにでも遠くの田舎へ引っ越したいが、引っ越し代や物件などを探す金がない。どうかこの家だけは超常事件に巻き込まれませんように、と願うばかりだ。

彼のこの行動ははたして吉と出るか凶と出るか。それは神のみぞ知る。

# プレゼントと三色団子と引き篭る奴

……もし仮に、ここがあのゲームの世界だとしたら。僕は色んな女の人から好意を抱かれている状態にあり、一歩でもその先をいこうとするならば修羅場へ、二人目を行こうとしたなら正拳突きを喰らうハメになる。

「どうするんだよマジで……」

そもそも現実ではできないからこそゲームで複数人を攻略し始めたのだ。現実でハーレムなんて出来っこないし、そんな器が僕にはないことは自分自身ちゃんと理解している。

「現実であの正拳突きくらったら確実に死ぬ」

司令のキャラ的に人を殺すほどの威力は出さないと思うけれど、それでも制裁的な面を含めた事はされる筈だ。

例えば頭に拳骨とか……。

「う、頭割られそう」

……まぁとにかく、この世界がどうなってるのか調べないとなぁ。

「あ……そっか、携帯で調べればいいんだ」

今時携帯一つでほとんどの情報を仕入れる事ができる事をパニックになっていた所為かすっかり忘れていた。

「えーっと……そうだな……『シンフォギア』っと……」

文字を打ち込み、検索ボタンを押す。元の世界のままなら、数万以上の検索結果が出る筈だ。

「……」

数秒後現れたのはヒットしませんでした。というページだった。

そして、今僕が居る世界がシンフォギアの世界だという証拠を得てしまった。その後もキャラ名で検索したりして見たが、イラストで出てきたのはアーティストとして活躍している風鳴翼やマリア・カデンツァヴナ・イヴ、天羽奏たちのみ。他のキャラクターたちはほとんど検索にヒットしなかった。

その代わり、ノイズを検索してみたら山のように検索結果が出てきたけれど。

携帯で調べ始めてからはや2時間。気がつけば日は暮れ、そして人間誰しも腹は減る。
「……何にもない」
冷蔵庫には調味料ばかりで唯一目に入った食料は豆腐のみ。豆腐だけで腹を満たすのは男子にはキツイものだった。
「買いに行くか……いや、うーん……」
外に出て彼女らと出くわしたくない、かと言ってこのまま飢え死にする訳にも行かない。
「よし、変装しよう」
いつか貰ったやってもいない野球チームの帽子と、灰色のパーカー。そしてマスクをしたら完璧な変装の出来上がりだ。
「スーパーを見つけて帰ってくるだけ、スーパーを見つけて帰ってくるだけ……」
自分自身に言い聞かせるよう呟いていると、ドアの隙間に白い紙が挟まっているのが見えた。
「なんだこれ……」
小さく折り畳まれたそれは手紙のようだった。
『プレゼントだよ。僕からのね』
短くそう書かれた手紙はボン！っと白い煙を立て、小さな掌サイズの機械へと変化した。
「ゲホッゲホッ……な、何だこれ？」
ボタンらしきものは上部にあるが、それ以外は液晶で出来ている。
「ば、爆発したりしないよな？」
誰かからそんなものを貰うくらいに恨まれた覚えは無いけど……。
出来る限り腕を伸ばして機械を遠ざけ、薄目になりながら恐る恐るボタンを押してみると、ピコン！と電子音が流れ、地図が表示された。
「何だこれ……ただの地図か？」
左下にはコンパスめいた物も表示されているが、どうやら危ない物では無さそうだ。
こんな物無くても地図アプリがあるし、使わないな～と思いながら

もう一度ボタンを押した。すると、地図上にはデフォルメされたキャラクター達が表示された。
「あれ？　この絵って……」
とても見覚えのある絵は画面で見ていた彼女たちの物だった。ゲームではこんなアイテムは無かったけれど。
潜水艦のマークがある場所に集まっているので、恐らく任務か何かだろう。ゲームだったら攻略キャラクターに用事や任務があった場合、主人公は自分磨きをするかバイト、またはプレゼントの買い物に出かけたりする事が出来た。
「って事は出会う心配は無いんだな……」
あくまで装者である彼女たちは、だけれど……。地図上には表示されていないので、心配する必要は無さそう、かな？
「まぁどちらにせよ近くには居ないみたいだし、さっさとスーパーに行っちゃおう。丁度地図にも表示されてるし！」
このプレゼントをくれた誰かに感謝をしながら僕はスーパーへと早足で向かった。

――

「面白いね、彼は」
白が目立つ服を着た男がワインを片手にそう呟く。
目の前に置かれた水晶玉の様な者にはスーパーの袋を両手に持つ青年の姿が映し出されていた。
「ねぇアダム～何であんなの渡しちゃったの？　わざわざ手作りで！
私もアダムからのプレゼント欲しい～！」
アダム、と呼ばれた男に後ろから覆いかぶさる少女――の様な人形がアダムの耳元で呟く。
「混乱してるのさ、彼は。この状況にね。だから助けたのさ……無論、善意からね」

アダムが彼を助けたのは紛れもなく善意からだった。彼は攻略対象外のキャラクターであっても好感度を上げるタイプであった。そんな彼がアダムの好感度を上げる事は当然の行為で……。
人でなしと呼ばれるアダムは彼のお陰で比較的キレイなアダムになっていた。
その結果、こうして知らずのうちにアダムに手助けされている事など彼は微塵も思っていないだろう。彼は今好意を向けられているだろう女たちに怯えているのだから。
「流石アダム！　そんな優しいアダムがティキはだいすき～～ッ！」
アダムはティキを見て頭を軽く撫でる。表情こそは変わりはしなかったが、口元が微かに上がっていた。

---

彼が買い物に行く前……。

「およよ？」
お気楽系常識人こと暁切歌は所属するS・O・N・G・本部にてその事実に気づく。手には缶ジュース、目の前にはおやつ。どうやら休憩中の様だ。
「どうしたの切ちゃん？」
隣に座っていた物静かな雰囲気のツインテール少女月読調は携帯を見つめて首を傾げる切歌に声をかけた。
「調、あの人に今電話とかできるデスか？」
「どうして？」
「電波が悪いのか、全く繋がらないのデス！」
そう言って携帯を上に向かって掲げる切歌。当然、電波は入っている。繋がらないのは相手が着信拒否をしているからという悲しい事

実を彼女らはまだ知らない。
「あれ……？　私も繋がらない」
『おかけになった電話番号は、お繋ぎする事が出来ません。電話番号を間違えているか、お確かめください――』
　電話を切り、連絡先に登録されている番号をもう一度確認して電話をかけるも同じメッセージが繰り返されるのみ。
「切ちゃん、私も繋がらない」
「なんデスと!?」
　調も切歌も何故？　という疑問が浮かび上がる。
「もしかして事故とか……」
「デデデデース!?」
　最悪の想像をしてしまい、休憩所では無くなった切歌は頭を抱えて慌て出す。
「メッセージアプリも返信は無いし、どうしたんだろう……」
「きっと誘拐されたんデス！　あの人は優しいデスから、お菓子に釣られてホイホイついて行っちゃったんデスよ！」
「切ちゃん、そんな子供じゃないんだから……」
「むむむ……」
　今度は腕を組み、何かを考え始める切歌。
「どうしたの？　二人とも。さっきから大きい声を出しているみたいだけれど……」
　休憩所に新たにやってきたのは元アイドル大統領マリア・カデンツァヴナ・イヴだった。
「あ、マリア」
　マリアに気づいた調は小さく呟くが、切歌は考える事に集中しているのか、マリアには気づいていない。
「何かあったの？」
　むむむと唸る切歌の様子を見てマリアは調にそう質問する。
「えっと――」
　調は先ほどまでの出来事をマリアに説明した。説明を聞いたマリアはポケットから携帯を取り出し、件の人物に電話をかける……。

「……ダメね。私も繋がらないみたい」
マリアが掛けても繋がらず、送ったメッセージも既読は付いていない。
「マリアもダメなの？」
「そうみたい」
「何か事件に巻き込まれてないか心配……」
調は心配そうに画面を見つめ、マリアはそんな調を見て電話に出ない（ようにした）彼に若干の怒りを覚える。
（全く、彼は何をしているのかしら……まさか本当に事件か何かに巻き込まれていたり……？）
「名案を思いついたデース！」
心配し始めるマリアを他所に、両手を腰に当て、切歌が得意げに語り始める。
「直接会えばいいんデス！」
「えぇっと……」
「た、確かにそうだけど切歌、貴方彼の家を知っているの？」
確かに切歌の言う通り、会えばいいだけだ。問題は彼の家を知っているか否かだが。
「知ってそうな人を知ってるデス！」
今から連れてくるから待ってるデス！　と言い残し切歌は何処かへと走り去ってしまった。
「大丈夫かしら……」
切歌の行動力の高さに残された二人は苦笑いした。

数分後。
切歌が連れてきたのはS．O．N．G．の司令を務める漢、風鳴弦十郎だった。
「連れてきたデス」
「司令!?」
てっきり他の装者の子たちを連れてくるのかと思っていたが、予想

外の人物を連れてきたので思わずマリアは声を上げる。
「いきなり腕を引っ張られてここまで来たんだが、切歌くんたちは俺に一体何の用なんだ？」
　弦十郎も困惑していた。
「住所を教えて欲しいデス、お菓子で誘拐されたかも知れないんデス！」
「切ちゃん、それだと訳が分からないよ」
「ええっと……――」
　マリアが弦十郎に今までの事を簡単に説明する。
「成る程な……それでアイツが誘拐されたかも、という訳か」
「そうデス！」
　弦十郎は腕を組み、少しばかり考える。
「確かに、家の住所は知っているが実は俺も余り行った試しが無くてな……アイツも他人を余り家に呼びたくないと言っていた」
「でも誘拐されたかもデスよッ」
「その件は俺が調べておこう。それまでは待機だ。――装者に関わりがある人間を誘拐、拉致しようとする者の狙いが装者たちへの混乱だったのなら……」
「相手の思う壺……という訳ね」
「そういう事だ。兎に角、この件については俺に任せてくれ」
「わ、分かったデース……」
　切歌は渋々……といった感じだった。できる事なら今すぐにでも行って確かめたいのだろう。
「切ちゃん、今は司令を信じて待とう」
　調は切歌の肩に手を乗せ、励ますように言う。

　本人の知らぬ所で事態が深刻化しそうになっているが、果たしてどうなるのだろうか。

小悪魔セーターとは小悪魔なのである。

「……」

お洒落な洋服店の前に一人の少女が居た。

「……」

透き通る様な銀髪の少女――雪音クリスは学校の制服に身を包み、カバンを手に持ちガラスケースに展示されている一つの服をジッと見つめている。

「……いや、うん……ねぇよな」

真っ赤なセーターは布地が少なく、ラブリーだの小悪魔だの以前に、着ている自分を想像すると顔が茹で上がってしまいそうになる。

値段に手が届かない訳では無い。見せる相手が……いない訳でも無い。ただ、これを自分で買うのは躊躇う。

「雪音じゃないか。どうした、店の前で」

そんなクリスに声を掛ける者が一人。

「せ、先輩ッ!?」

クリスが後ろを振り返ると、其処には変装用のサングラスと帽子を被る見知った顔がいた。

風鳴翼――防人系女子である。彼女は一応アーティストとして活動しており、所謂有名人である。帽子とサングラスだけで変装できているのか？　と思われるかも知れないが、案外バレないものらしい。本人曰くだが。

「そんなに驚く様な事か？」

翼はクスリと笑う。

「べッ……別に、何もしてねぇよ」

「ほう……それにしては飾っているそれを長々と見ていた様だが？」

「な――ッ」

背後にあるセーターを長々と見ていた事を見られていた事と、最初から見ていたなら何故声を掛けなかったのかという疑問と恥ずかしさが混ざり合い、声にならない声を出してしまうクリス。

「ふむ……こう言った服は攻めている、と言うのだろう？　これを買

うのか？」
「か、かかか買わねーよッ！」
「そうなのか……」
　クリスが顔を赤くしながら言うと
　翼は残念そうにしている。
「雪音は赤色が似合うからな。私はこれを着ている雪音が見てみたかったのだが……」
「そ、そういや先輩はこんなとこで何してたんだ!?」
　このままでは嫌な流れになりそうだと察したクリスは無理矢理話題を逸らすことにした。
「私も買い物だ。防人らしい服装を探していたのだが、これが中々見つからなくてな」
「防人らしい格好って……」
　防人らしい格好。そう聞いてクリスが思い浮かべたのは重々しい甲冑を見に纏い、「いざ、防人らん！」と叫ぶ翼の姿だった。
「どうした雪音？」
「い、いや別に」
　少し笑いそうになったのを必死に耐えるクリスと、それを不思議そうに首を傾げる翼。
「マリアとかなら分かるんじゃねぇか？　それか、アイツとか……」
「アイツ？　あぁ、なるほどな。年代の近い男性に聴いてみるというのもひとつの手か」
　翼は携帯を取り出し、電話をかけ始める。数秒後、電話が繋がる筈だったのだが、電話に出ない。
「む……？」
「どうしたんだ？」
　何度も掛け直す翼に疑問を抱いなのか、クリスはそう聞いた。
「何度掛けても『この電話をお繋ぎする事はできません』と言われるのだが……」
「んなバカな事が……」

クリスも携帯を取り出し、電話を掛け始める。数秒後、クリスにも翼が聞いたものと同じメッセージが再生された。
「……アタシもだ。繋がんねぇ」
「前まではすぐに連絡をくれたのだが、どうしたのだろうか？」
「まぁ履歴見て電話してくるだろ。ッたく、次会った時は文句言ってやる」
「致し方あるまい。彼奴とて用事が出来ることもあるだろう」
という事で。件の人物には繋がらないので翼はマリアへと電話を掛けた。
「マリアか？　実はな――」
『――翼ッ！　彼に連絡とか着いたりしない!?』
「む、どうしたんだいきなり？」
いつになく焦った様子のマリアに翼は思わず問い返した。
『5日ほど前から連絡が途切れているのよ。メッセージの返信も無いし、何か厄介ごとに巻き込まれているんじゃないかと切歌たちが騒いでてね……』
「5日……？」
はて。前にメッセージを送ったのはついさっきの筈なのだが。
『それで、他の皆にも聞いて……って、どうしたの？』
「いや……なんでもない。続けてくれ」
疑問は残りつつも、翼はマリアとの会話を続ける。
『司令が調べると言っては居たけれど、やっぱり心配で居てもたってもいられなくて……今翼は一人で居るの？』
「いや。雪音も居るぞ」
『丁度良いわ。クリスに代わってもらえるかしら』
「あぁわかった。雪音！　マリアからだ」
翼は自身の携帯を足元の小石を蹴って暇を潰していたクリスに投げ渡す。いきなり携帯を投げられたクリスは目を見開いて驚いたが、なんとかキャッチした。
「危なッ！　いきなり投げつけるなよ！」
「すまん、つい……」

「ッたく……もしもし？」
翼の携帯を耳に当て、今度はクリスがマリアと話し始める。
「はァ!?　……まぁ、別にいいけど……分かった。それじゃあな」
クリスは通話を切り、翼に手渡す。
「マリアは何と？」
「今からアイツについて話したい事があるから部屋を貸してくれ、だってさ。何で毎回毎回あたしの部屋なんだよ……」
装者＋αたちにとってはもはやクリスの部屋は溜まり場と化している事が多い。その事に若干文句を言いつつも了承したらしく、案外溜まり場になっている事に不満は無いのかもしれない。
（しかし何だ？　この妙な違和感は……）
翼はマリアの言っていた時間と自分の感じている時間に差異がある事に疑問を抱きつつ、クリスの部屋へと向かうのであった。

「何の用だい？　朝早くから」
小綺麗に掃除され、景色の良い場所にあるアダムの部屋に一人の女性が居た。
「最近、高価な素材をかなりの数使用されたそうですね。……何を作られたのですか」
手には紙の束が握られており、その殆どに赤いバツ印が書かれており、材料費の所には０がとても多く並んでいる。
「勿論プレゼントさ、友人へのね」
「人でなしの貴方に出来る友人など……あぁ成る程、彼ですか」
アダムは怪しい笑みを浮かべて頷いた。女性はその笑みを見て苦労しているであろう青年に同情をする。
「いい物だね、友人と言うのは。暇な時間に楽しみを与えてくれる」
「ハァ……貴方の交友関係に私がケチをつける立場ではありませんが、この素材たちに関してはどう始末を付けるおつもりですか？　一

日や二日で集まる物ではありませんよ」
「どうにかするさ、そこら辺は」
そう言ってアダムは水晶玉を撫でる。其処には例の人物が映り出した。
「趣味が悪いですね、監視とは」
「見てみなよサンジェルマン。君も気になっているんだろう？　彼の事を」
アダムは女性――サンジェルマンの方へと水晶玉を軽々しく投げる。
「これは……」
難なくキャッチしたそれに映されていたのは……。

引き篭り生活開始から5日目。
いつも傍にマップを置いているが特に今のところは変化なし。これがあるおかげで外で出会う確率がグンと減ったし、買い物にも気楽にいくことができる。
もう恐るものなんて何もない。勝ったな、ガハハ！

……と、調子に乗り始めたのが運の尽きだった。
「おい。何を黙っている」
現在、僕は寝室で正座をさせられている。何故かって？　わからないよ。僕にもね。
「言ったはずだぞオレは。近い内に会いに行くと。それなのになんだ？　この馬鹿げたモノは」
彼女が手に持っているのは例のマップである。彼女はそれを忌々しい目で見ながら握っている。
「コレのお陰でお前を探すのに随分と苦労させられた。全く……大方奴が膨大な魔力を使って作り上げたんだろうが……」

ふん！　と鼻を鳴らしてそれを僕の手元へ投げ捨てる。ガシャンと豪快な音を立てながら転がってくるマップくん。
「お前はそれを唯の地図だと思って持っていたようだが、大間違いだ」
「そ、そうなん……ですか」
一瞬タメ口になり掛けたので慌てて敬語に戻す。怒らせたら怖いから。
「それにはオレですら感知する事が困難なほど微弱な電波が発信されていてな……その電波のお陰で苦労させられた訳だ。分かるか？」
要約すると、その電波のお陰で僕は見つかる事が無かったらしい。というかそんな機能付いてたのか……そのお陰で今まで見つからなかったと。なんて素晴らしい道具だったんだ。
「えぇはいとても分かります。苦労をかけさせてしまい誠に申し訳ありませんでした！」
深々と頭を下げる。何故僕は怒られているのか、全くわからないがとにかく謝ったほうがいいと本能が告げていた。目の前にいる人物が人物なので。

「それについてはまぁ、いい。オレはお前の居場所がもう分かるからな。他の奴らが見つけれなかろうが関係ない。今お前がすべき事は一つだけだ……少し、付き合え」
こほん、と小さく咳払いをした後彼女は小さく呟いた。その声を聞いて見上げてみたが、彼女は帽子のツバをグッと下げて表情を見られないようにしていた。
鈍感系主人公ならばここで聞き返したりしたのだろうが、そんな事をする勇気はあいにく持ち合わせていない。
それに選択肢は無いような物なので、僕はしっかりと彼女に返事をした。
ちなみに彼女というのはキャロル・マールス・ディーンハイム。攻略難易度が高めの第三期ラスボス系錬金術師である。
彼女のいう付き合え、とは恐らくデート的な意味で間違い無いだろう。錬金術なんか使えるわけもない僕からすれば目の前に猛獣が居

るのと変わらない。好きとか嫌いとか以前に、間違った対応をすれば死ぬんじゃないかという恐怖心が勝ってしまった。
　容姿はこんなにかわいいのに、綺麗なバラにはトゲがあるとはよく言ったものだ。画面の前で見るのと、実際に会うのとではこうも違うのかと理解した日だった。……この先他のキャラたちと会う事になると考えると……。
「1時間後にまた来る……お前も用意して待っていろ。いいな？」
「あっ、ハイ……」
　そう言ってキャロルは床に何かを叩きつけて去っていった。

「……まずい、まずいまずいまずいぞ！　テレポートジェムチートすぎぃ！」
　彼女が目の前から消えてから、一気に焦り出す。
　というかテレポートジェムって座標固定とかしないと危ない道具じゃなかったっけ!?　いつの間に座標登録されたのこの家!?　逃げ場ないじゃん！
　完全にキャロル√入りかけてるよコレ！　入ったらマズイって！

「逃げ……られそうに無いよなぁ」
　居るであろうオートスコアラーとキャロルから逃げ切れるヴィジョンなんて欠片も見えないし、逃げたら何されるか分かったものじゃ無い。かと言って、デートしている所を他のキャラクターに見られでもしたら……。
「詰んだ」
　高感度の最大値は大きなピンクのハート（同性の場合は青色）。最低値はドクロマーク。修羅場になる時は確か爆弾マークだった筈だ。
　他の人とのデートが見られるたびにドクロマークか爆弾マークに近づいていき、最悪ＢＡＤＥＮＤとして積み上げたデータが消去される事もあるらしい。浮気にはとことん厳しいゲームだ。
「ちゃんとセーブデータ一個ずつ使ってクリアすれば良かった……！」

過去の自分の努力がまさかこうして返ってくるとは、努力は身を結ぶ所か身を破滅させに来ている。

# 大体みんな生きてる幸せな世界

立花響は年齢＝彼氏無しの明るく元気な少女である。好きなものはご飯＆ａｍｐ；ご飯。

彼女は様々な戦いの末、其処らの成人男性より強くなっているが、そこは彼女の師匠である風鳴弦十郎のお陰。

「届いたッ」

人助けが趣味な彼女は今も元気に人助け中。

「はい、これ！」

「ありがとうお姉ちゃん！」

木の上に引っかかってしまったラジコンを泣きそうな顔で見ている少年を見た彼女は慣れた手つきで木に登り、ラジコンを救出する事に成功した。

その後もお婆さんの荷物を持ってあげたり、迷子の世話をしていたりと、色々あったあと彼女は自宅へと帰宅した。

「ただいまーッ！」

「おかえり響。また人助けしていたの？」

リビングから親友の小日向未来が顔を見せる。

「遅れてごめん～未来ぅ～！」

「まぁ響の人助けは今始まったわけじゃないし、もう慣れてるけどね」

やれやれと溜め息を吐きそうな未来の雰囲気に響は謝るしかなかった。

「それで、ちゃんと材料は買ってきたの？」

「うん！　未来のメモ通りちゃーんと買ってきたよッ」

ジャジャーン！　と誇らしげに差し出されたエコバッグにはキチンと渡したメモに書かれている材料が入っていた。

「うん、ちゃんと入ってるね。……でも響、これは何？」

未来が笑顔で取り出したのは全く関係の無い菓子の袋。響は「しまった、分けるのを忘れてた！」と今にも言いそうな顔になる。

「えっ～と……美味しそうだったからつい……」

「もう。ダイエットするんだ～って言って、暫く間食はやめるって先日言ったばかりじゃない」
「返す言葉もございません……」
　響は装者として給料も貰っており、其処らで働くサラリーマンの何倍もの金額になる。そのほとんどを食費に費やす彼女のお財布係も未来がしていたりする。
　叱られてちょっぴり落ち込んでいる響を見て未来はクスリと微笑み、響の頭にポンと手を置く。
「全くもう……ほら、急がないと折角のプレゼントが作れないよ？」
「うぅ……そうだね」
　未来の言葉に響は顔を上げる。
「じゃあ作ろっか、ケーキ」
「うん！　美味しいのいっぱい作ろうッ！」
　響は気合いを入れてエプロンを握りしめる。買ってきた材料とは、誰かに贈るためのケーキの材料だったのだ。
　そのケーキを贈る相手とは、勿論例の人物である。響は日頃の感謝の印として、自分で作ったケーキを贈りたいと未来に相談した。そう入れ知恵したのは響の母親だったりする。未来としてもお世話になっている人に感謝を伝える良いチャンスだと思い、こうして一緒に作ろうという話になったのだ。
　カチャカチャと、テーブルに使う器材が並べられる。
「ねぇ響。あの人って、どんなケーキが好きだっけ？」
「うーん……確かチョコ？　あれ、抹茶だっけ？」
　響は首を左右に揺らしながら思い出そうとしているが、どうにも思い出せない様子だった。
「じゃあ、色んな味のを少しずつ作ろっか」
「おぉー！　いいねそれ！　流石未来ッ」
　二人は鼻歌を歌いながらケーキを作っていく。
「喜んでくれるかなぁ……？」
「喜んでくれるよ、絶対」
　二人の愛情を込めたケーキは完成し、後は連絡を取って贈るだけと

なった。
「えーっと……『今週、空いてる日はありますか？』っと……」
　メッセージを打つ指は心なしか震えていた。胸に手を当てると、いつもより鼓動が早いような感じがする。
「えいッ！」
　深呼吸をした後、送信ボタンを押した響は一仕事終えたように椅子に座り込んだ。
「毎回毎回大袈裟なんだから……」
「あはは……何でだろう、前まではそんな事無かったのにな～」
　響も未来も、まともな青春を送ってきたとは言い難い。普通の人を好きになって、告白して、付き合って……そんな事を経験する機会なんて無く、胸に抱く感情が何なのか未だに分かっていない様だった。互いに。
　あれから３０分以上経ち、響はメッセージアプリを起動する。
「あれー？　まだ既読がついてないや」
「そうなの？」
「いつもならすぐに返信来るんだけどなぁ」
　ゲームの仕様状、すぐに既読がついて返信が来るのは当然なのだが、ここはゲームでない上、怯えた相手側が見ないよう、来ないようにしているのだからどうしようもない。
　そんなこんなで返信を待っていると、マリアから着信が掛かる。
「もしもしマリアさん？　どうしたんです？」
『この後、時間はあるかしら？　少しみんなを集めて話したいことがあるの』
「話したいこと？」
『彼についてよ』
　彼というのは響の思い浮かべる人物で相違ないだろう。しかし、みんなを集めてまで話すような事があっただろうか？
「わかりました！　何処に向かえばいいですか？」
『クリスの家よ。今、他のみんなにも連絡を回してるから、出来るだけ早く来てくれると助かるわ』

「了解ですッ」
響がマリアとの通話を切ると、未来が話しかける。
「何かあったの？　任務？」
「ううん。マリアさんがあの人について話したいことがあるからクリスちゃんの家に集まって、って」
「マリアさんがあの人の事……？」
マリアがみんなを集める→恐らく喜ばしい発表→まさか婚約!?
あの人と!?
未来は身体中に電撃が走ったかのように驚き、思考が加速する。
「それ、私も行ってもいいのかな!?」
「うぇ？　多分いいと思うけど……？」
「響、早く片付けてクリスの家に行こう！」
未来が突然急ぎだし、響も慌てて片付けに参加する。少々勘違いは起きているが、これでクリスの家に全員が集まることとなった。

「あらおかえりなさいマスター、どうでした？　上手く誘えましたぁ？」
キャロルが帰るや否やくるくると回りながらオートスコアラーの一人、精根の腐ったガリィが声を掛けた。
「1時間後に会う様には言った」
自分の中では上手く誘えた方だと思っているキャロルは何処か自慢気に言い返す。
「ふぅん……そうですか」
「なんだ、その含んだ言い方は」
「べっつにー？　あ、ガリィちゃんは忙しいのでこれにて失礼しまーす」
ガリィの意味深な言葉に疑問を持ったが、まぁいつものことかとキャロルは考えないようにした。

キャロルが自室の前に着くと、若干ドアが開いている事に気づく。
「……おい、勝手に部屋に入るなと言っただろう」
「はわわ！　ご、ごめんキャロル」
部屋の中にはキャロルととても似た容姿の少女？が一人。何やら紙の束を持っていたようだが、キャロルが入ってきた事に驚き、バサバサと落としてしまう。
「何をしているんだお前は……」
「うぅ……キャロルがデートに行くって聞いたからボクなりに色々と調べてみたんだけど……」
彼女？の名はエルフナイン。キャロルが作り出したホムンクルスの一体であったが、なんやかんや合って今はこうして互いの家に行ったり、泊まったりしていたりする。
性別はなく、ゲームでは元々攻略キャラクターでは無かったが、「なぜ彼女はヒロインじゃないんだい？」「エルフナインちゃんを１人ぼっちにさせるなッ！」「プチョヘンザだッ！」等のクレームが入り、ＤＬＣで攻略キャラクター入りを果たした。（シナリオ付９８０円）
ちなみに彼女は課金用アイテムショップに設置されていたキャラクターだったため、買わせタインちゃんとかいう不名誉な渾名を付けられている。
「……『はじめてのでーと』に『はじめてのふぁっしょん』、『はじめてのぐるめ』……お前、オレを舐めてるのか？」
小馬鹿にしたようなタイトルばかりが並んだ紙の束をグシャリと握りしめるキャロルを見てエルフナインは慌てて弁解し始める。
「ち、違うんだキャロル！　これは上手く題名が思いつかなかっただけで、決して悪意があるわけでは……」
幼児向けの題名が悪意がないなどと、笑わせてくれるなエルフナイン！　と、普段ならそう怒鳴っていた筈だが、今日のキャロルは彼をデートにうまく誘えた（と思っている）ので、機嫌がとても良い。
「……まぁ、参考にだけはしてやる」
「本当!?　良かったぁ……」
キャロルが怒っていないと分かったエルフナインはホッとしてい

る。
「それでねキャロル、まずはこれなんだけど――」
「……成る程な――」
それから約束の1時間まで、キャロルとエルフナインはデートの戦略を練った。最初はここへ行き、次はあそこだの、若干開いたドアからはその声が漏れている。
「姉妹みたいだゾ～！」
「なんだかんだ言って仲が良いんでしょう」
「派手なデートになりそうだな」
「楽しみですねぇデート……」
4体のオートスコアラーはそんな二人を影から見つめ
「キャロルの初デート……うぅ……大人になったんだなぁ……」
父親は一人ハンカチで涙を拭っていた。

# こうなる運命だったのだ

「何をしている、行くぞ」
　目の前には大人モードではなく、少女モードのキャロルが腕を組んで立っていた。洋服も、画面上でも見たことがないお洒落な可愛い物を着込んでいる。攻略キャラ毎に最後のデートには今まで見た事がない新衣装を纏って登場するというのは本当だったらしい。普通にかわいい（語彙力皆無）。
　……いやかわいいとか言っている場合じゃないんだが？
「今行くよ……」
　……それにしても、まさか二次元の中に居た人とデートに行くなんて考えもしなかった。（選択肢が無いに等しかったとは言え）
　複数の異性に好意を寄せられるなんて事自体あり得ないと思っていたのに、人生とは何が起きるかわからないんだね。……あ、そうだ明日ゴミの日だな～ハハハハ。
（フン。世辞の一つも言えんのか、こいつは……）
　折角お前の為に普段着ないような洋服を着てきてやったのに。キャロルは内心愚痴る。しかし、エルフナインが持って来た資料に寄れば、相手も緊張しているかもしれないので、会って早速褒めてもらおうとは思わない事。と赤文字で書かれていたので、ここはグッと堪える。その相手は洋服を気にする余裕は無く、現実逃避をしているが。
「今日はオレが誘ったんだ。オレがお前を導いてやる」
「分かったよ。よろしくキャロル……さん」
「……さん付けはやめろ。今更他人行儀になる必要など何処にも無いだろう」
「あ、ハイ」
　彼はキャロルがデートプランとか練ってきてくれてるんだな、と何となく察してしまったので、今更「やっぱり行けません」とは口が裂けても言えなかった。

言ったら最後裂けるのは口だけでは済まなそうだから。

そんなこんなで数時間後、修羅場が始まるとも知らずに、デートが開始された。

案内されて着いたのは水族館だった。テレポートジェムを使えば一瞬で到着するんじゃない？　と言ってみたらそれでは面白くない、バカかと罵倒され公共の交通機関を使ってやってきた。

「はぁー……」

目の前を泳ぐ魚たちはとても元気だ。今度生まれ変わるなら魚になってもいい。マンボウとか。

ここまで来てしまったら流石にデートするしかないだろう。経験は殆ど無いに等しいが、とにかく機嫌を損ねないよう楽しんでおけば大丈夫だろう、多分。あぁ……選択肢とかが頭上に浮かんでたら楽だったんだけどなぁ……

「見ろ、アイツ立花響に似ているぞ」

「ほんとだー」

キャロルは泳ぐマグロを指差して真顔でそう言った。……何が誰に似ているかは本人の主観によるので、とりあえず同意しておく。

キャーカワイイー！

キミノホウガカワイイヨ

エェーヤダーモウー！

……それにしても周りはカップルが多い。水族館ってこんなにカップルが多かっただろうか？　まぁいいや。

「イルカショーだってキャロル。観に行く？」

「……お前が観たいと言うなら観てやってもいいぞ」

「そっか。じゃあ僕観たいし一緒に行こうか」

「フン、仕方がないな」

いろんな魚を見て回る中、チラチラとポスターを見ていたのでもしかしたらと思ったんだけどどうやら合っていたみたいだ。

「何処に座ろうか？」
館内ポスターで一番の名物と書かれていただけあって、イルカショーが開催される場所は人がいっぱいいた。
「……お前が観たいんだろう、お前が決めろ。オレはどこでもいい」
前は水で濡れるからな～……かと言って後ろすぎてもよく見えないだろうし。
「まぁかわいい服が濡れたらダメだし、真ん中辺りに座ろうか」
濡れて機嫌損なってここら辺更地とかになったらヤバいし……。
「あ……あぁ、そうだな」
僕が席に座ったから数秒後にキャロルは隣に座ってきた。服の事触れたの地雷だったかな？　いやでも折角の衣装だし、一言くらい触れとかなきゃダメだよね？
緑髪の飼育員さんから水除けのシートを受け取り、いよいよイルカショーの始まりだ。
『派手にイルカショーを始める』
『元気なイルカの登場だゾ～！』
「おいちょっと待て……！」
キャロルが何か言い掛けていたが、子供たちやカップルの声で掻き消された。
綺麗な氷細工の輪っかをイルカは通り抜けたり、ボールを輪っかを通してキャッチボールしたり、素人目に見ても凄いと言わざるを得ないものばかりだった。イルカが飛ばした水は空中で氷になり、パラパラと宙を舞う。
それを見て、見に来て正解だったなぁと心から思った。

「はーい！　こちら記念撮影の場所ですぅ～　そこのカップルさん！撮って行きませんか？」
そろそろ水族館の出口に差し掛かろうとしている時、曲がり角からひょっこりと顔を出した女の人に呼び止められた。
「ペンギンさんの帽子もあるゾ～！」
女の人の横に居た妙に手が大きいペンギンの着ぐるみが帽子を

キャロルに被せる。
「やめろ、いらん！　被せるな！」
かわいい帽子を被せられたキャロルは少し頬を赤く染めながら拒否する。
「でもでも～彼氏さんは被ってらっしゃいますよぉ～？」
貰ったので着けました。
「くッ……」
物凄く嫌そうな顔をしつつ、キャロルは帽子を受け取りゆっくり被った。
「ジロジロ見るなッ！」
中々キュートな格好になったキャロルを褒めようかと少しばかり考えたが、褒めたら怒られそうだからやめました。
「派手に写真を撮る」
「もっと近づかないと、いい写真が撮れませんわよ？」
カメラマンの二人がもっと近づけと言うが既に腕が触れ合う程度まで近づいている。
「なんだかカップルらしくないですねぇ～……そうだ！　彼女さん、ほっぺにチューしちゃいましょう！」
「バッ……！　ふざけるな、こんな所で出来るかッ」
ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべて提案されたそれの所為で今までにないくらい真っ赤な顔になったキャロル。
「……もういいだろう、さっさと撮れッ」
結局ほっぺにチューは無くなり、代わりにキャロルをお姫様抱っこする事になった（どうして）
出来上がった写真は僕は少し困惑気味の笑顔で、キャロルは不満げだが何処か満足そうに見えた。終始意地の悪い笑みを浮かべていた飼育員さんが気になったが。

「クソッあいつら、いつの間に……ガリィの奴が妙に大人しくしていたと思ってはいたが……」

記念撮影を終えた辺りからキャロルは舌打ちをしたり独り言を呟いたりしている。
「大丈夫？」
「ん……心配するな。此方側の問題だ」
「次、どうする？　ご飯でも食べる？」
時刻は昼過ぎ。昼食にはちょうど良い時間帯である。
「任せろ。店の方は確保している」
キャロルは若干ドヤ顔でそう言った。錬金術師ってお金持ちそう（偏見）だから高級レストランとかだったりして……いや、それはそれで緊張するな。
「へぇ～……たのしみだ「あぁ～～～ッ!!!」……な？」
水族館から出ると、其処には居るはずのない、というか居てほしくなかった人物の一人が此方を思い切り指差していた。
「此処に居たんデスか！」
デス子こと暁切歌。その顔は嬉しそうというより怒っている様に見えるのは気のせいでしょうか？
「イガリマの装者が何故ここにいる？」
「行方不明だったその人をみんなで探してたんデス！」
え？　行方不明？
「携帯も通じないデスし、メッセージの既読も付かない、位置情報もわからないなんて行方不明以外の何が当てはまると言うのデスか！」
携帯が通じないと言われた辺りで僕はそう言えば全員着信拒否をしていた事を思い出す。
（あ……これ死んだかも）
初めに出会ったのがこの子じゃなかったら……小日向未来とかだったらヤバかった、ヤバかった（大事なことなので二回言う）
「知るか。オレたちは今デート中だ。用は済んだだろう？　おい、行くぞ。時間に遅れる」
キャロルはデートの邪魔をされて不機嫌メーターがゴリゴリ上がっていそうです。
物凄い力で腕を引っ張られ、そのまま切歌の方を一切振り向かず進

んでいきます。
「あッ！　ちょっ、ちょっと待つデスよ！」
　切歌は慌てて携帯を出して何処かへ電話し始める。これ、まずい流れじゃない？　俗に言う修羅場√入ってない？
「もしもし調？　遂に見つけたんデスよ！　え？　……うまいもんマップの話じゃないデス！　あの人デスよ！　○○水族館でデートを――」
　切歌の声はどんどん遠ざかり、遂に聞こえなくなった。
「チッ……お前、何をやらかしたんだ？」
　薄暗い路地裏に入るとキャロルは手を離し、そう聞いてきた。
　ここまで来て隠せるとは思えなかったので、素直に話す事にした。元の世界うんぬんは抜きにして。
　……訳を話すとキャロルは大きな溜息を吐いた。
「全く……お前が悪いと言わざるを得ないな。一体何を考えてそんな馬鹿な事をしでかしたんだ？」
「精神的に参っていたと言いますか……えぇっと……ハハハ」
　上手い具合に言い訳が思いつかず、笑うしかなかった。貴女達と居ると命の危険を感じるので縁を断ち切りたいと素直に言える度胸も無ければ外道でも無かったのであの手段を取ってしまったわけだが、結果として最悪の事態を引き起こした様だ。
　……益々会いたくない理由が増えてしまっている。自分の所為とはいえ。
「フン……だが、これは良い機会だ」
　キャロルは腕を組み、笑みを浮かべた。
「プランとはかなりズレてしまったが……装者共とその他の奴らに見せつける良い機会だ」
「……見せつけるとは？」
「そんなもの、決まっているだろう――愛だッ！」

# クローゼットの隠し事

「で、話ってのは一体何なんだよ」
　切歌がデートの現場に遭遇する3時間前……クリスの部屋にはシンフォギア装者たち＋αが集まっていた。
「そうね……まず皆に聞いておきたいのは、彼と最後に連絡をつけれたのはいつ？」
「1時間程前だと思うが……」
「あたしもだな」
　まず声を上げたのは翼とクリス。
「あたしは3日前デス」
「私も」
　次に切歌と調が。
「私はついさっき、なのかな？　返信は来ないですけど……」
「私は、先週だったかな？」
　最後に響と未来が答える。
「……ありがとう。これで一つ、分かったことがあるわ――私達は皆、気付かない内に認識がズレている……いえ、ズラされていると言った方が正しいのかも知れないわ」
　マリアは眉間に皺を寄せ、そう言った。
「どういう事だよ？　別に、身体に異常なんてねぇぞ？」
　ギアペンダントにも異常は無い、とクリスは言う。
「私もエルフナインから聞いた事の受け売りなのだけど、恐らく彼に何らかの異端技術を使われたモノが渡され、それによって彼に連絡を取らせない状況にされていたみたい」
　要はアダムが勝手に送りつけたアレである。
「異端技術という事は、やはり錬金術師が彼に接触したと？」
　事態を重く見た翼はマリアに質問する。
「……そこまでは分からないわ。だけど彼の身に何かが起こっているのは間違いない」
　尚当人はその時点で家に引き篭もっていたのだが。

「えぇッ!?　なら、今すぐ助けに行かないとッ」
　響は話を聞いて思わず立ち上がる。
「やっぱり誘拐なんデスよッ！」
　切歌もまた、机をバンバンと叩きながら主張する。
　好意はまだ人それぞれだが、話題の人物に対し一定以上の好感を持っているのは事実であり、その人物が危険な目にあっていると知れば、こうなる事は当然と言えるだろう。
「ただ闇雲に探して見つかるわけでもあるまい。マリア、司令は何と？」
「司令から渡されたのは、彼の家の住所だけよ。彼はあまり人を家に呼びたく無いと言っていたけれど、緊急事態だからって」
　取り出した茶封筒の内容を聞いた彼女達はピクリと反応する。
「じゅ、住所聞いたんですか?!」
　意外にも一番初めに声を上げたのは未来だった。
「え、えぇ……」
「──ハッ！　ご、ごめんなさい！　つい……」
　未来は恥ずかしそうに顔を俯かせる。マリアは彼女が親友の事以外で熱意を出すタイプだと思っていなかった為、少しばかり驚いた。
「マリア、今からあの人の家に行くって事？」
　黙って話を聞いていた調が口を開く。
　その言葉にマリアは頷いた。
「早速出陣デス！」
「おぉ～ッ！」
　家から飛び出して行こうとするイノシシ二頭はクリスによってすぐに捕獲される。
「気が早えーんだよこのバカ共ッ」
「うぅ……だってぇ……」
「クリス先輩は心配じゃないんデスか!?」
「うえッ!?　いや、そりゃあ……まぁ、心配だけど……」
　クリスは若干顔を赤くする。素直な気持ちで言うならば、今すぐにでも探しにいきたいというのが本音である。

「とりあえず、彼の家に行きましょうか」

――という訳で。家の前に来た訳だが……。

「おぉ、ここがあの人の……」
「普通のお家だね」
「うむ。立派な家だと思うぞ」
「良い家」
「おぉ～！」
「中々いい家じゃねぇか？」
「まぁ想像通りかしら？」

そんな思い思いの感想を言った後、早速扉の前に立つ。尚未来は装者では無いため、離れた場所に待機している。

「早速入っちまうデスよ！」
「待って切ちゃん、私も」

とたとたと早速家の中へ入ろうとする二人組。

「待ちなさい二人とも！　そもそも鍵が掛かっているでしょうし、何があるのかわから――」
「およ？」

切歌がドアノブを回す。するとバキッ！　という嫌な音が鳴りドアそのものが取れてしまったのである。

「な、なんデスとーーー!?」
「そんなに古くは見えないのに……」

ドアは音を立てて倒れ、壊してしまったと思っている切歌は涙目になっている。調は目を見開いて涙目の切歌と共にドアをゆっくりと地面に倒す。

「いやいや、引っ張ったくらいで取れんのか？」

不思議に思うクリスを他所にやはり何者かに手を出されたのだと翼は確信し、ギアペンダントを握りしめる。

翼がギアを纏ってから、他の装者たちも同じくギアを纏った。
『翼、周囲にそれらしき反応はない。だが、気を引き締めろ』
「分かっています」
通信機から弦十郎の声が入り、返答する。
「行きますッ！」
ギアを纏った響が気合いを入れて部屋へ突入した。
「……あれ？」
どんな悲惨な現場になっているかと心配していたのだが、部屋は案外綺麗なままだった。
「どうなってんだ？」
「壊れていたのは扉だけ、という事か？」
次いで入ったクリスと翼が口を開く。そもそも誰にも襲われていないのだから当然と言えば当然なのだが、そんな事を知らない彼女たちからすれば疑問は深まるばかりである。
『ひ……っ……クリ……聞こ……』
「あぁ？　聞こえねぇぞ、クソッなんでだ」
三人の通信機が突然不調になる。ノイズでかき乱され、まともに受け答えができない。
「どうしたの!?」
「えーっと……通信機が不調みたいで！」
「こっちは全然問題ないデスよ？」
「……うん、ちゃんと聞こえる」
中に入った三人は通信機が不調になり、念の為外で待機していた三人はその様子がない。
「どうして……？」
「この部屋の何処かに、通信を妨害している装置か何かがあるのだろう。まずは、それを探さねばなるまい」
「……家を荒らすなんてやりたかねーけど、仕方ねぇか」
という事で部屋を物色し始める三人。アダムのプレゼントは一件普通の小物にしか見えない為、それが原因だと分かるまで時間がかかるだろう。

「……アイツこんなのが趣味なのか」
中を探して数分後、クリスが見つけたのは所謂成人誌であった。クローゼットを開いたら、隅の方にダンボールが見えたから怪しいなと思って開けただけだとの事（本人談）。
（って事ぁ、あのセーター（ラブリー♡セーター）も、あいつの好みに合うって事なのか？）
思わぬ足止めを食らいクリスは手が止まり、自分があのセーターを見に纏い彼の元に行く想像まで浮かんだ。
（か、完全に痴女じゃねーかッ！　あーもう！　なんでこんな時にそんな想像しちまうんだよッ！）
頭をブンブンと横に振り、そんな妄想を振り払う。
「クリスちゃん？　何かあったの？」
そんなクリスを見た響は、何をしているのだろうと思い、声を掛けた。
「なッなんでもねーよ！」
急に声をかけられ思わずクリスは本をグシャっとした。ギアを纏っているため、もはやコレは本ではなく紙屑になってしまった。
「？　今何か音が……」
別の場所を探していた翼はその音を聞き、顔を覗かせる。クリスは他の人達が探している中、自分は成人向け雑誌を読んでいた。しかも恥ずかしい格好をしている自分を少しとは言え想像してしまった。そんな事実を知られたくなかった。認めたくなかった。
「ウ……ガァァァァァ!!」
そしていつぞやの響が暴走した時の様な叫び声を上げながら、クリスはダンボールを窓から放り投げ、ミサイルをぶち当てたのだ。
「えええぇッ!?」
「な、どうしたんだ雪音ッ!?」
大きな爆発の後、パラパラと彼が溜めていた雑誌は空から舞い降りる。まるで黒い雪のようだぁ…・…。
響たちはいきなりの行動に目を丸くし、クリスを心配するも、本人は顔を赤くして大丈夫だッ！の一点張りだった。

「外で爆発デスよ！」
「あれはクリス先輩の……？」
「中で何かあったのかしら……でも、爆発があってから三人が出てくる気配は無いし……」
　その爆発音は外にいる者達にもしっかりと聞こえていたし見えていた。
「ん？　なんデスか？　これ……」
　パラパラと舞い落ちる黒いモノの中に一つ、色のついたモノが残っていた。
　大きさにして彼女の掌の半分以下の紙切れには女の顔が映っている。
「雑誌、かな？」
　調も切歌が拾ったものが何なのか気になり、見せてもらう。
「マリア！　これはなん――」
　切歌がマリアにその紙切れを見せた瞬間、それは瞬時に引ったくられ、握り潰され地面に叩きつけられ踏みつけられた。
（ふぅ……成る程、あの子がこんな事（爆破）をするのも無理は無いわ）
「マ、マリア？」
「なんでもないわ」
「でも――」
「なんでもないわ。いい？」
　何で紙切れ一つにそこまでしたのか疑問に思った二人は、聞いてみようと思ったが、マリアが圧のあるとても良い笑顔だったので聞けなかった。
『はぁい、イルカショーは間もなく開演でーす』
「どうした？」
「いや、何か急に悪寒が……」
　イルカショーが始まる僅か数分前の出来事である。

# 高く付くぞ、オレの愛は

「これが原因の機械？」
エロ本爆破（打ち上げ花火）から数刻後……響たちは原因と思われる機械を見つけた。
「手鏡のような物かと思ったのだが、これを持った時、雑音が聞こえたからもしやと思ってな」
「って事ぁこいつをぶっ壊せばいい訳だな」
代償に部屋は来た時より散らかってしまった（翼が主にやった）が……。
「待て雪音。下手に触れて、爆破でもされたらまずい。一度距離を置いて司令に連絡しよう」
という事で一度その機械を置き、響たちは外へ出た。
『良かった！　ようやく繋がりました！』
三人が部屋を出て数メートルほど移動した瞬間、エルフナインから通信が入った。
『……なるほど、翼。一先ずその機械の回収は此方に任せろ。だが、先に回収される恐れがある』
「分かりました。私は此処で見張りをします」
残りの者は機械の解析が終わるまで周辺で彼の捜索に当たることを弦十郎が命令する。
「私は未来とこの辺りを回ってみますッ！」
響は未来と現在地周辺を。
「なら私はクリスと人気の無い場所を中心に当たるわ」
マリアとクリスは人気のない場所を。
「あたしたちはあっちを探すデス！」
切歌と調は逆に人混みへ（主に切歌の勘）

そうして切歌の勘が当たり、水族館で鉢合わせした後……。

「切ちゃん！　あの人が居たって本当？」
　切歌の連絡を受け、額に汗を滲ませ息を切らせながら調が走ってやってきた。
「ほんとデス！　しかも、デートしてたんデス!!」
「……デート？　誰と？」
　調の声のトーンが僅かに下がる。
「キャロルデス！　腕を組んで、水族館から出てきたんデスよッ」
「じゃあ、あの人に連絡が付かなかったのは、キャロルと一緒に居たからってこと？」
「……そう言うことになるんデスかね？」
　もやもや。
　自分たちは必死に探していたのに、当の本人は異性とデートをしていた。そう考えると胸の中にもやもやが募った。
　連絡が途絶えたのは当人が悪いのでキャロルは悪くないのだが、そんな事情を知らない二人は早速他の皆にも連絡を回す。
『は？』
　切歌の話を聞いた皆はそう思っただ、う。
「な、なんデスか……この重圧感は……ねぇ調……調？」
　皆が急に無言になった為、自分は何かやってしまったのかと切歌は冷や汗を流した。
「……」
　隣にいる調に声をかけた切歌だが、調は俯いたまま一言も喋らない。
「どうしたのデスか！　何処か痛いのデスか!?」
「ううん、大丈夫だよ切ちゃん。ちょっと、変な気分になっただけ」
「そ、そうデスか……？」
　調は胸に手を当て、深呼吸をする。
（うん、大丈夫。少し落ち着いた。でも何だろう……胸が少しチクチクする？）

『うぅ……ごめんなさい、まさかキャロルのデートの相手が彼だったとは思いもしませんでした……』
　切歌の連絡を受け、集まった装者たち御一行はエルフナインからの通信を受けていた。
「いいのよ。貴方が悪いわけじゃないわ」
　エルフナイン曰く、デートスポットなどを選んだのは自分であるとの事。
「エルフナインちゃんはキャロルちゃんの為に色々してたんでしょ？　なら全然悪い事じゃないし、むしろ褒められるものだよッ！」
『ありがとうございます響さん、マリアさん。ですが、僕がキャロルに少しでも相手の事を聞いていれば皆さんの時間を無駄にすることも無かった訳ですし……』
「まぁここでとやかく言ってもしょうがねーだろ。とりあえず文句を言うならアイツだ」
『すみません……』
「じゃあ早速行くデスよ！」
『分かりました。キャロルが行きそうなスポットを……アレ？』
「どうかしたの？　エルフナイン」
『いつの間にか見覚えの無いてがみが……キャロルから？　えーっと……結婚式の招待状……け、結婚式!?』
　ガタガタ！　ドタン！　バサバサ！
　通信機越しに物の数秒で大きな物音を立てたエルフナイン。内容を聞いて驚いたのは彼女だけでは無かった。
「えぇッ!?　け、結婚式!?　キャロルちゃんが!?」
「お、落ち着いて響ッ　深呼吸しなきゃ、ひーひーふーだよ！」
「バカッ、そりゃラマーズ法だろ！」
「……（驚きすぎて開いた口が塞がらない）」
「結婚相手はまさかあの人デスか!?」
「……あまりの展開に驚きを禁じ得ない」

「え、エルフナイン。宛先も差出人も間違っていないの？」
　エルフナインに届いた招待状にはこう書かれていた――
『拝啓　花の便りが相次ぐ今日この頃。装者含む皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。さて、このたび私たちは結婚式を挙げることになりました。つきましてはぜひ皆様に立会人となって、私たち二人の門出を見届けていただきたく結婚式を行いたいと存じます。おいそがしいなか誠に恐縮ではございますが、ぜひご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。〇年〇月〇日　キャロル・マールス・ディーンハイム　』
　下の方には式場の場所や日時も書かれており、その日付はなんと明日だった。
「ど、どどどどどうしよう!?」
「どうするったって、どうすんだよ！」
　クリスは抱きついてきた響を引き剥がしながらいう。
「行方不明になって心配かけて、その上結婚式？　ハァ……あ、頭が痛くなるわ」
　マリアもこの状況について行けず、頭を抱えていた。
（キャロルちゃんの結婚式……おめでとう！　って言いたいんだけど、何だろう、この胸の気持ち……痛いんじゃない、辛い……？）
（やっぱり、ダメ。あの人が結婚するって考えちゃうと……胸が締め付けられる様。ううん。違う、今まではそう思い込んで居たんだ……これって、やっぱり――）
　彼女たちの脳裏に彼との思い出が蘇る。今までは仲の良い友人、または兄の様だと慕っていた彼女たち。
（あぁ～～ッ！　クソッ！　なんでこうムシャクシャしやがるんだ。アイツが結婚しようが、別にあたしには関係ねぇじゃねぇかッ　なんでこんなに、こんなに――）
（めでたい事だと頭は理解しているが、どうも胸の騒めきが治らない。彼の顔を暫く見ていないからか？　それとも……いや、まさか――）
　しかし、今回の一件で彼女たちの心に変化が訪れた。
（……手の掛かる弟だと、そう思っていたのに、この気持ちは……何な

の？　家族が結婚するなんて、とてもおめでたい事じゃない！　それなのに何で胸にポッカリと穴が開いてしまった様な気持ちになるの？）
（あの人が幸せなら、あたしも幸せだと思ってたのに……どうして心の中にひっかかる様なものがあるんデスか？　笑顔でお祝いしようと、思ったのにこれじゃあ笑顔になれそうにないデス……）
（あの人の笑った顔が好きだった。お兄ちゃんみたいで、頭を撫でられるのも、子供扱いされるのも擽ったくて……でも何処か嬉しかった。そんな人が結婚するのはとても幸せな事だと思ってたのに……どうしても胸のもやもやが晴れないの？）

「……」
　水晶越しに今までの経緯を一通り見ていたサンジェルマンは眉間に皺を寄せ、大きなため息を吐いた。
「良い友人だろう、彼は」
アダム（人でなし）は笑みを浮かべている。友人と称する割には彼で遊んでいる様にしか見えないが、彼なりの愛情表現らしい。迷惑極まりないが。
「どうなさるおつもりですか。殆ど貴方が元凶でしょう」
「どうもしないさ、今はね。それよりもいいのかい？　このままで」
　意味深な言葉を言うアダムにサンジェルマンの顔は強張るばかりである。
「このままで、とは？」
「君と彼の事さ。このままだとキャロルや彼女らに取られてしまうよ」
「……わたしには関係ありませんので」
　アダムの見透かした様な言葉にサンジェルマンは興味なさげに返事をした。
「素直じゃないね、君も。だけど急いだ方がいいよ？　君の部下たちはもう行ってしまったみたいだからね」

「は……？」
　サンジェルマンは目を丸くする。
「カリオストロとプレラーティさ。彼がキャロルとデートをしていると連絡したら飛び出していったよ。ついさっきね」
「なッ……！」
「夢中で見ていたからね、水晶（それ）を。普段の君なら僕が連絡している事にも勘付いたろうけど」
「貴方と言う人は……！」
　持っていた水晶がピシリとヒビが入る。殴りたくなる様な笑みを浮かべて自身を見ているアダムに小さく舌打ちをし、サンジェルマンはテレポートジェムを使い部下たちの元へと急いだ。
「やはり面白いね、愛と言うのは」
　人でなしはうんうんと頷く。彼は悪意を持って行動しているわけではないので余計にタチが悪いというワケダ。
「アダム〜〜！　一緒に映画見よッ！」
　サンジェルマンと入れ違いに、ＤＶＤを持ったティキが部屋に入って来た。
「やぁティキ。なんの映画だい、それは」
「ゴジラ！」
「見ようか、式までの暇つぶしにね。楽しみだよ、どう転ぶか」
　尚アダムに招待状は届いていない。

「ふぅ……」
　キャロルが愛を見せつけると高々に宣言して連れてこられたのは彼女の拠点の一つであるチフォージュシャトー……に似た城の様な家、今現在彼女が暮らす場所である。リアルに見るとデカすぎる。
　入って早々になにやら彼女は何かの準備をするらしく、僕はキャロルに『此処に居ろ、いいな？　勝手に移動するな』と言われ個室に入れられて鍵も閉められたので自力で出ることは不可能である。窓か

ら出ようにも結構な高さであり降りたら確実に死ぬ。ＯＴＯＮＡじゃなきゃ無理だ。
「次はこのゲームがやりたいんだゾ～！」
キャロルは監視役にミカを置いて行ったのだが……彼女の場合その準備とやらの役に立たなさそうだからここに置いたのではないかと僕は思っている。手が大きいし、細かな作業には向いていないだろうし。
ミカは暇つぶしにとたくさんのゲームを両手に抱えていた。他のオートスコアラーとやるのも楽しいけれど、他の人ともやりたいらしい。
「うん、やろうか」
今僕には何にもする事が無いので、ミカとゲームをしていた。テレビゲームは僕が操作し、ミカが何をするか決めるという方針だ。
「次はあいつを倒すんだゾ！」
……しかし何故僕の膝の上に座っているのか。
「おー！　やったゾ～！」
ブンブンと目の前で揺れる大きな手がとても怖いけれど僕は元気です。
「──お前はマスターの事、どう思ってるんだゾ？」
道中のレベル上げをしている時、ミカが後ろを振り向かずにそう質問してきた。
「どう……って？」
元気なキャラであると思っていたミカが突然静かになり、そんな質問をされた。……何やら不穏な空気を感じ、質問を質問で返す。
「勿論、好きか嫌いかだゾ？」
いや、そりゃあ好きか嫌いかで言ったら好き以外に無いんだけれども。此処で嫌いとか言ったらその大きな手でトマトみたいにプチっとされそうだよ。
「まぁ……好きかな、その二択なら」
「……そっか！　良かったゾ～！　結婚式は好きな人同士がやるって聞いたから、ミカは心配だったんだゾ～！」

花咲く様な笑みでミカは振り向いた。
……いやいや待て待て、今とんでもないことを言わなかったか
この人形ちゃんは!?
「け、結婚式って、誰と誰の？」
「ん？　マスターとオマエに決まってるゾ」
「!?」
結婚するのか……？　僕は。
何を言っているんだコイツと言わんばかりの顔でミカは僕を見ている。
準備する事、愛を見せつけるってそう言う意味だったの!?　しかも見せつけるって事は、装者たちは勿論司令にも見せる可能性もあるって事だよね？　……止めないとヤバくない？　キャロル√に入っているならば、まぁもう文句はない。けれど修羅場に持ち込もうとするのは非常に（命が）まずい。
「コラ！　ダメだゾ！　ミカはオマエをここから出しちゃいけないって命令されてるんだゾ！」
「いや、止めないとマズイんだって！　お願いだから行かせて！」
大きな手でがっしりと身体を固定され、身動きが取れない。
「ム～あんまり暴れられるとめんどくさいゾ～……あ！」
ミカは持っていた彼を手放し、懐から注射器のようなものを取り出した。
「え、何それ……」
「ガリィから貰った大人しくさせるお薬だゾ！　ちょっとこれで寝てて欲しいんだゾ」
「落ち着こうかミカ。素人が注射とかするのは危ないから！　危険だからやめッ……やめろォ!?」
チクッと僅かな痛みと共に僕の意識は無くなった。

「……地味に静かになった様だ」
「ミカが薬でも打ち込んだんでしょうね」

式場のセッティングを行なっていたオートスコアラーの二人はそう呟いた。
辺りを見てみると、装飾品や花、来場者の為の椅子などがほぼほぼ設置し終えており作業の早さが見て取れた。
「それにしてもマスターも派手な事をする」
「ええ、本当に。でも嫌いじゃ無いわ」
現在キャロルはガリィと共にウェディングドレスの制作中。普段のムスッとしたよう顔ではなく、ドレスを選ぶ姿は真剣そのものだった。
「さて。飾り付けも殆ど終えたから、出迎えにでも行きましょうか。無理矢理にでも連れてこいとの命令ですもの……フフ」
ファラは妖艶な笑みを浮かべる。
「私に地味は似合わない……派手に出迎えに行くとしよう」